

## 固有名と記憶 (1)

神谷英二\*

**要旨** 固有名は人間の記憶とどのように関わるのか。固有名は集合的記憶にどのような影響を与えているのか。本研究は、ヴァルター・ベンヤミンの初期言語論を主要な手がかりに、「固有名と記憶」について思索を進め、これらの問いに応えるものである。本論文は、本研究全体の第1部にあたり、まず、ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」の成立事情をショーレムとベンヤミンの記録により明らかにする。次に、このテキストの構成を確認する。その上で、言語と名・名づけの関わりについて解明を進め、固有名の理論へと至り、最後にベンヤミン独自の「翻訳」概念について考察する。この研究により、固有名としての人間の名は、神の言語と人間の言語の中間的審級であり、誕生とともに受け取られた所与であるとともに、永続的な創造の源泉であることが明らかになる。また、翻訳とは、神が人間に委託した通りに、人間が名なきものを名づけることであることが分かる。

**キーワード** 言語 名 固有名 翻訳 記憶 ベンヤミン

O braungebackne Siegessäule  
mit Winterzucker aus den Kindertagen.

Walter Benjamin (GS VII, 385)

### はじめに

ここに『亡命の住所録』(Walter Benjamin : *das Adressbuch des Exils 1933-1940*) という小ぶりな本がある。ベンヤミンがドイツを追われ、パリに亡命者として滞在していた時期の住所録を写真版として収録している興味深い書籍

である。ここには無数の人の名と土地の名が刻まれている。住所録は固有名の塊である。例えば、Sの項目には、親友ショーレムの名と彼のイェルサレムの住所が記されている(Scholem Jerusalem Rechargie B Rambon Street 51) (Fischer-Defoy 2006, 58f.)。パリでの亡命の日々、ベンヤミンにとっては、この住所が大切な土地の名として記憶され、繰り返し繰り返し宛名として書かれていたのである。

この「イェルサレム」という土地の名は言うまでもなく、眩暈がするほどの多くの記憶と結

\* 福岡県立大学人間社会学部一般教育等准教授

びついている。信仰の記憶、望郷の記憶、殺戮の記憶、政争の記憶。

地名が多くの記憶の手がかりとなるものであることは確かである。個人の記憶にとどまらず、集合的記憶の拠り所となりうるものである。

また、そもそも「ゲルショム・ショーレム」という人名が、ベンヤミンの記憶に多くの場を占め、さまざまな働きをしてきたことは間違いないだろう。それどころか、20世紀のユダヤ思想やカバラに関心をもつ人々をはじめとする、多くの同時代人や彼の死後の私たち現代の集合的記憶に大きな役割を果たしてきたことと思われる。

こうした見解は経験的には確実であるように多くの人は考えるであろう。それでは、哲学の営為として、どのように記述しうるのだろうか。固有名は人間の記憶とどのように関わるのか。固有名は想起の作用にどのように関わっているのか。集合的記憶にどのような影響を与えているのか。本研究は、ヴァルター・ベンヤミンの初期言語論を主要な手がかりとして、「固有名と記憶」について思索を進め、これらの問いに応えるものである。

本論文は、本研究全体の第1部にあたる。論述の順序として、まず、ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」の成立事情をショーレムとベンヤミンの書簡などの記録により明らかにする。次に、このテキストの構成を確認する。その上で、言語と名・名づけの関わりについて説明を進め、固有名の理論へと至り、最後にベンヤミン独自の「翻訳」概念について考察する。

## 1 ベンヤミン初期言語論・「言語一般および人間の言語について」の成立事情

「言語一般および人間の言語について」は、1916年に成立したとされる。このベンヤミン最初期の論考は生前には刊行されることはなかった。しかし、ハンデルマンの表現を借りれば、この論文は「今日の文芸批評と神学批評のなかで、彼の作品のなかで最も議論を呼んだ作品の一つ」(Handelman 1991, 62)である。また、哲学における言語論と翻訳論にも強いインパクトを与え続けており、近年はデリダの言語論・翻訳論と関係づけて論じられることも多い。(cf. Hirsch 1995, 柿木 2005)

彼は30年代前半にも、「模倣の能力について」(1933年)、「類似したものについての試論」(1933年)、「言語社会学の問題」(1934年)などの言語論を残しているので、この論文で展開される言語論を初期言語論と呼ぶことにしよう。

この論文で展開される言語論を理解するには、この論考が成立した、かなり特殊とも言える事情を振り返ることが有益である。(cf. Reijen und Doorn 2001, 40ff.)

1916年、この年、ベンヤミンは満24歳であり、ミュンヘン大学で学んでいた。この前年にゲルショム・ショーレムと知り合っており、ショーレムは当時ベルリンに住んでいたが、二人はかなり親密な付き合いを続けていたようである。この論考は、そうしたショーレムとの知的交流のなかで、私的な覚え書として書かれたものである。ショーレムは、『わが友ベンヤミン』のなかで、次のように記録している。

「このころ私は、数学と言語の関係についてかなり長い手紙を彼に送り、一連の質問をそれ

に付け加えた。彼が書きかけて中断した長い返信は、のちに改稿されて、論文「言語一般および人間の言語について」となる。これは彼に言わせると第1章で、さらに二つの章が続くはずだった。彼はこの論文の写しを1916年12月、ベルリンに帰ってきた時に私に手渡した。彼が帰ってきたのは、3度目の徴兵検査の通知を受けたからで、検査の日の1週間ばかり前だった。」(Scholem 1975, 48)

ここで、ベンヤミン自身による証言も見ておこう。1916年11月11日付けでミュンヘンから送ったショーレム宛書簡のなかに、この論考のことがはっきり記されている。

「親愛なるショーレム様

すぐにご連絡いただいたことに、たいへん感謝しています。——1週間前にあなたに手紙を書きはじめたのですが、書き終えてみると18枚もの長さになっていました。それは、あなたが提起してくださった非常に多くの問いのいくつかに、脈絡をつけながら答えようとする試みでした。そうこうするうちに、対象をもっと厳密に把握するために、それを小さな論文に書きかえる決意をしないわけにいかなくなりました。いまはその清書に取り組んでいるところです。その論文では、数学と言語、すなわち、数学と思考、数学とシオンに立ち入ることはできませんでした。というのも、限りなく困難なこのテーマについての私の思想は、まだまだ不十分極まりないからです。しかし、それとは別の形で、その論考で私は、言語の本質との対決を試みています。——しかも、私の理解する限りでは、ユダヤ思想と内在的に関係づけながら、また創世記の最初の数章と関係づけて。そこに記された考えについて、あなたの判断を聞かせていただきたいと思っています。それは大きな支

えになるだろうと期待しています。もう少しすればその論考をあなたにお送りできます。——いつになるかまだ分かりませんが、おそらくは1週間、あるいはもう少し先になるかも知れません。すでに申し上げたように、その論考はまだ完成していません。「言語一般および人間の言語について」というタイトルから、あなたはある種の体系的意図を見て取られるでしょうが、そのような意図に照らせば、思想の断片的なところが私にとってはきわめて明瞭にもなります。何しろ、触れるべき多くの問題を私は残したままですから。(以下、略)」(GB I, 343f.)

この二つの証言から分かるように、ショーレムによる数学と言語に関わる論考に触発されて、短期間に一気に書かれた試論というのが、「言語一般および人間の言語について」の性格である。ただし、十分に留意すべきであるのは、ベンヤミンが書簡のなかで「言語の本質との対決を試みている」と述べ、未完としながらも「体系的意図」に言及していることである。

また、ベンヤミンの書簡のなかで「シオン」(Zion)と「ユダヤ思想」(Judentum)について触れられていることにも着目した方がよいだろう。こうした記述もこの論考をユダヤ神秘主義思想の影響の濃い秘教的言語論とする見方の傍証となっていると言えるだろう。

なお、ベンヤミンがこの論考を書く際に、新カント派的認識論との対決を意識していたことが見過ごされてはならない。例えば、1924年6月13日付けで、カプリ島から送られたショーレム宛書簡のなかには、次のような記述がある。

「この序論のなかに、君は、「言語一般および人間の言語について」の論稿以来、久しぶりに僕の認識論的な試行を見出すだろう。」(GB II,

464)

ここで言及されている「この序論」とは、当時ベンヤミンが執筆していた「教授資格申請論文」(Habilitationsschrift)の序論のことである。この論文は『ドイツ悲劇の根源』となつて、翌1925年、フランクフルト大学に提出されたが、周知のように、彼の研究が当時審査にあたった教授陣に受け入れられることはなく、結局彼に教授資格が与えられることはなかった。『ドイツ悲劇の根源』の序論は、「認識批判的序論」と題され、哲学的批判の方法論としての、彼独自の認識論が展開されている。

この「認識批判的序論」と「言語一般および人間の言語について」のつながりについては、1925年2月19日付け、ショーレム宛書簡のなかでベンヤミンは次のように書いている。

「序論は並外れて向こう見ずなものだ。(中略)君も知っている、僕の以前の、あの言語論の、よりよいかどうかは分からないが、理念論(Ideenlehre)の装いを凝らした第2の発展段階といったものだ。」(GB III, 14)

これまで見てきたことから分かるように、「言語一般および人間の言語について」は、ショーレムとの学問的交流のなかで書かれた、公刊を想定しない試論である。しばしば指摘されるように、ユダヤ思想の影響が強いことも確かである。しかし、秘教的な、不必要に難解な、断片的なメモというようなものでは決してなく、体系的意図のある著述、または、統一的な理論形成の一部であると言ってよいものである。単なる言語論にとどまるものではなく、彼独自の認識論へとつながってゆく研究の第一歩なのである。

なお、この「言語一般および人間の言語について」に関しては、以下のように、包括的なコ

メンタールと言っている研究書が2冊存在する。私は、これらの優れた先行研究を必要に応じて参照しつつ、本研究を展開することとする。

Kather, Regine(1989): “*Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*”, die *Sprachphilosophie Walter Benjamins*, Peter Lang.

細見和之(2009):『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む一言葉と語りえぬもの一』岩波書店

## 2 「言語一般および人間の言語について」の構成

まず、「言語一般および人間の言語について」の構成を見ておくことにする。このテキストは、全部で26の段落からなっている。細見はこの論文の全体を4部に分けて解釈している。私も基本的にこの分類は妥当であると考えている。

〈細見による分類〉

第1部: 第1段落～第12段落: 言語についての抽象的理論

第2部: 第13段落～第21段落: 創世記のアレゴリー解釈による具体的説明

A: 第13段落～第18段落: 「楽園」における言語一般および人間の言語について

B: 第19段落～第21段落: 「墮罪」ののちの言語一般および人間の言語について

第3部: 第22段落～第26段落: 言語の純化された概念

(細見 2009, X Vf.)

それに対して、カーターは次のように分けて

注釈を展開している。

〈カーターによる分類〉

- 第1部：第1段落～第12段落：多数の言語  
 第2部：第13段落～第18段落：言語活動の基礎  
 と人間的言語作用の遂行  
 第3部：第19段落～第25段落：言語と歴史性  
 第4部：第26段落：言語活動の統一  
 (Kather 1989)

本稿では、まず、言語一般と人間の言語について明らかにするために、第1段落から第12段落まで、すなわち、細見とカーターの分類による「第1部」を主に分析する。その後、固有名の理論と翻訳について明らかにするために、細見の言う「第2部A」(カーターの分類では「第2部」)を主に読解する。

### 3 言語一般から人間の言語へ

言語とは、「精神的内容の伝達をめざす原理を意味している。」(GS II, 140)これが、「言語一般および人間の言語について」における議論の出発点である。ここでは、考察の対象は、人間の言語に限定されることはなく、言語一般に拡張される。ベンヤミンは次のように考える。

「言語の存在は、(中略)文字通り一切のものに及んでいる。生ある自然のうちにも生なき自然のうちにも、ある一定の仕方で言語に関与していない出来事や事物は存在しない。というのも、自己の精神的内容を伝達することは、すべてのものにとって不可欠だからである。」(GS II, 140f.)したがって、言葉(Wort)による伝達は、人間の言語(Sprache)が行う伝達の

うちの特殊な一つのケースなのである。

ベンヤミンの初期言語論は、精神的本質と言語的本質が同一であるという理解しがたいパラドクスを避けることから始まる。言語一般である事物の言語において、まず精神的本質と言語的本質と言語が区別される。

「言語は何を伝達するのか。言語は自身に合致する精神的本質を伝達する。この精神的本質は自己を言語において(*in*)伝達するのであって、言語によって(*durch*)ではない。」(GS II, 142)そして、「例えばドイツ語は、われわれがそれによって表現できると誤って考えるものすべてにとっての表現では決してなく、ドイツ語において自己を伝達するものの直接表現なのである。ここに言うこの〈自己〉こそが精神的本質にほかならない。これによってまず、言語において自己を伝達する精神的本質は言語そのものではなく、言語とは区別されるべき何かである、ということが自明となる。」(GS II, 141)

ここから分かるように、しばしば誤解されるように、精神的本質は言語的本質につねに外側から等しいのではなく、それが伝達可能な限りにおいてのみ、言語的本質と同一なのである。

言語は、事物の言語的本質を伝達する。そして、ベンヤミンによれば、「事物の言語的本質とはそれらの事物の言語のことである」(GS II, 142)というのである。これは単なる同語反復なのではないか。そうでないとすれば、これは一体いかなる事態なのだろうか。例えば、ランプの言語が伝達するのは、そのランプそのものではなく、言語としてのランプ、表現になったランプのことである。(Bolz und Reijen 1991, 42)したがって、精神的本質の伝達可能性は、言語的本質によって限定されて

いると言えるのである。どの言語も自己自身において自己を伝達するのであり、言語はすべて最も純粋な意味で伝達の〈媒質〉(Medium)なのである。媒質としての言語は、能動にして受動であるものなのであり、精神的本質の伝達の直接性(無媒介性)をなしている。この直接性をベンヤミンは、「言語の魔術」(GS II, 143)と呼んでいる。

それでは次に、上記の命題を人間に適用してみよう。すると、「人間の言語的本質とは人間の言語のことであり」(GS II, 143)ということになる。人間の言語は、事物の言語、すなわち「言語一般」とは異なるものである。人間の言語は、言葉で自己を伝達する。そして、人間は人間以外のあらゆる事物を名づけることによって、伝達可能である限りにおいて、自己の精神的本質を伝達するのである。ベンヤミンは次のように断言する。

「人間の言語的本質とは、人間が事物を名づけることをいう。」(GS II, 143)

先述の事物の言語的本質に関する考察から、事物は名づけられることによって、自己を人間に伝達すると言ってよいだろう。それでは、何のために人間は名づけるのだろうか。誰に自己の精神的本質を伝達するのであろうか。

人間の精神的本質は、名づけることで、余すところなく伝達可能であるとベンヤミンは考える。人間の精神的本質は、言語そのものなのであり、それは神の創造が完成する「純粋言語」である。「人間の精神的本質は、名において自己を神に伝達する。」(GS II, 144)ここで、『創世記』において、アダムが事物を名で呼んだことを思い出すべきである。「人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。」(『創世記』第2章第19節)<sup>\*1</sup>

先の問いに応えよう。ここから明らかになるように、人間は神に自己の精神的本質を伝達するために名づけるのである。

ベンヤミンにとって、「名こそ言語そのものの最も内的な本質である。」(GS II, 144)そして、名、すなわち「名一言語」(Namen-sprache)は、人間と事物の真の認識が含まれている根源的な言語である。しかし、名としての人間の言語は、真の認識を含むとはいえ、単なる客観的な認識のみを行うものではない。名である以上、名づけられ、呼びかけられ続けるものである。

「名は言語の究極の語り出し(Ausruf)であるのみならず、また、言語の本来的な呼びかけ(Anruf)でもある。」そして、「名において自己自身を語り出すことと他のすべてのものに呼びかけることは同じ一つのことである。」(GS II, 145)<sup>\*2</sup>

人間はもちろん、日々刻々、事物の名を呼んでいる。しかし、「呼びかけ」というあり方で私たちがすぐに思い浮かべるのは、事物の名ではなく、固有名による呼びかけであろう。人間は、つねに人の名を呼び、土地の名を呼ぶこととともに生きているのである。こうして、本稿の考察は、名から固有名の理論へと移行することになる<sup>\*3</sup>。

#### 4 名から固有名の理論へ

これまでの名についての議論を踏まえて、次にベンヤミンにおける固有名の理論を検討することにしよう。固有名の理論についての言及は、「言語一般および人間の言語について」第15段落から始まる。

「この神の言葉の最も深遠なる写しであるも

の、そして、人間の言語が単なる言葉の神的無限性への最も内的な与りを獲得する地点、言い換えれば、人間の言語が有限ならざる言葉にも認識にもなりえない地点をなしているもの、それが人間の名である。固有名理論は、有限の言語が無限の言語に境を接する、その境界についての理論なのだ。あらゆる存在のなかで人間は、そもそも神が名を与えなかった唯一の存在なのであって、自分の同胞を自ら名づける唯一の存在である。」(GS II, 149)

このなかで語られている「人間の名」は、人間の言語である名、名一言語のことではなく、固有名のことである。それは、名一言語に比べて神の無限性に近いものであり、「創造の媒質としての神の言語」(GS II, 149)に近接するものである。

ここで一つ熟考すべきことがある。名とは文法上の普通名詞であり、固有名とは固有名詞のことであると単純に理解してよいのだろうか。例えば、『創世記』においてアダムが動物につける名は、単なる分類を示す普通名詞ではなく、固有名でもあると言える。細見も指摘するように、固有名とは、人間に即して言えば、名づけられた瞬間からその相手はその名前を生涯にわたって、場合によっては死後もなお、担い続けるもののことである。(細見 2009, 118)

そして、あらゆる被造物のなかで人間のみが、自分の同胞を自ら名づけることができ、名づけられることができる。親が子を名づけるという事態について、ベンヤミンは次のように書いている。

「名を与えることによって、両親はその子どもたちを神に捧げる。生まれてきたばかりの子どもを名づけるのであるから、ここで彼らが与える名に符合するのは——語源的ではなく形而

上学的に理解するなら——認識ではない。厳密に言うならば、いかなる人間も名に(その語源的意味に即して)符合してはいない。」(GS II, 149f.)

なぜこのように主張できるのだろうか。

「それは固有名が、人間の音声となった神の言葉だからである。固有名によってすべての人間に、神により創造されたことが保証される。そしてこの意味で、固有名そのものが創造するものであるのだ。」(GS II, 150)

すなわち、人間の音声となった神の言葉である固有名を担って、神により創造されたことを保証され、人間は誰もがまさにかげがえのない存在者となるということである。それゆえ、固有名とは「人間が神の創造する言葉と結ぶ共同性にほかならない」(GS II, 150)と言えるのである。

このようにして、固有名としての人間の名は、神の言語と人間の言語の中間的審級であることが明らかになる。そして、その名は誕生とともに受け取られた所与であるとともに、永続的な創造の源泉でもあるのだ。(Mosès 2006, 162)

## 5 ベンヤミンの翻訳論

これまでの議論を踏まえて、ベンヤミンは、第17段落から彼独自の翻訳論を展開する。本研究は、翻訳論を主題とするものではないので、本格的な読解は行わないが、この翻訳論は記憶論研究にとって一つの重要な手がかりを提供するものと私は考えており、必要な範囲で考察しておきたい。

神の言葉においては、自発性と受容性が、いわばせめぎ合っている。第16段落の最後でこう

した事態が指摘されている。

「名のなかにあっては、神の言葉は創造性を持続してはならず、その言葉はある部分において、言語受容とはいえ受容する力をもつものとなっている。事物からは、これまた音声を欠いたまま、自然の黙せる魔術のうちに、神の言葉が放射しているのだが、これらの事物の言語を受け入れることこそを、この受容はめざしているのである。」(GS II, 150)

そして、「言語の領域においてのみこうした無比なる結合の姿で見出される、受容にして同時に自発性であるものを言い表わすのに、言語はしかし、それ自身の言葉をもっている。そしてこの言葉は、また、名なきものを名において受け入れる、右に述べた受容にも妥当するのだ。」(GS II, 150)

この「言葉」こそが、「翻訳」(Übersetzung)である。ここにベンヤミン独自の「翻訳」概念が登場する<sup>\*4</sup>。それではここから、彼自身の定義を読み込んでゆくことにしよう。

「それは翻訳という言葉、事物の言語の、人間の言語への翻訳である。翻訳の概念を言語理論の最も深い層において根拠づけることが、必要不可欠である。(中略) 高次の言語は(神の言葉を除き)どれも他のすべての言語の翻訳とみなすことができる、と認識した時に、この翻訳の概念はその十全たる意味を獲得する。」(GS II, 150f.)

それでは、ベンヤミンの考える翻訳は、自然の黙せる、音声を欠いた事物の言語を音声あるものとしての人間の言語へと転換することなのだろうか。ベンヤミンはここにとどまることはない。次のようにさらなる質的拡張を主張している。

「事物の言語を人間の言語に翻訳することは、

単に黙せるものを音声あるものへ翻訳することだけをいうのではない。それは、名なきものを名へと翻訳することをいう。したがって、それは、ある不完全な言語をより完全な言語に翻訳することである。それは何かを付加することができる。この何かは、つまり、認識にほかならない。」(GS II, 151)<sup>\*5</sup>

それでは、こうした翻訳の妥当性や客観性はいかにして保証されるのだろうか。こうした働きを翻訳と呼ぶとしても、それは何ら客観性を保証しえない、偶然性に支配されたものではないのだろうか。

「この翻訳の客観性が保証されているのは、神のうちにあってである。というのも、神が事物を創造したからであり、それぞれの創造がなされた後、神はさらに最後にそれぞれの事物を名づけたように、それらの事物のうちなる創造の言葉が、認識する名の萌芽となるからである。とはいっても、この神による命名は明らかに、創造する言葉と認識する名とが神において同一である、まさにそのことの表現なのであって、神がはっきりと人間自身に与えた課題、つまり事物に名を与えるという課題を先取りして解決するものではない。」(GS II, 151)

この課題とは、『創世記』第2章第19節において示されている、人間による人間以外の生き物への名づけのことである。

「そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。」

神が人間に委託した通りに、人間が名なきものを名づけるのが、ベンヤミンにとっては翻訳なのである。ここにはすでに、「翻訳はある

言語から他の言語へ直接には行えないのであり、必ず媒介されていなくてはならない」という、後年、「翻訳者の使命」で提出されるテーゼが潜在していると言えるだろう。(Bolz und Reijen 1991, 45)

そして、翻訳という概念が登場してはじめて、ようやくここにベンヤミンの初期言語論の基本構造が明らかとなる。

「事物の存在のうちにある黙せる言葉は、人間の認識のうちにある名づける言葉よりも限りなく遠く低次のものであり、この人間の認識のうちにある名づける言葉は、これまた神の創造する言葉には及ばない。そこに、人間の言語が多数に分かれる理由が与えられている。つまり、事物の言語が認識にして名である言語そのものなかへ入りゆくことができるのは、ただ翻訳においてだけなのだが——ところが、人間が一つの言語だけを知っていた楽園の状況からひとたび墮ちてしまうや否や、そんなにも多くの翻訳、そんなにも多くの言語が生じるほかなかった。」(GS II, 152)

すなわち、「言語一般および人間の言語について」に表された、言語論の基本構造は、以下の通りである。

「事物の存在のうちにある黙せる言葉」  
 |  
 「人間の認識のうちにある命名する言葉」  
 |  
 「神の創造する言葉」

この基本構造からも分かるように、この言語論は単なる言語の理論にとどまるものではない。この理論は翻訳論でもあり、認識論でもある。さらに、ユダヤ神秘主義の影響を受けて展

開された言語を媒質とした世界像であるとも言えるだろう。(浅井 1995, 673)あるいは、「存在するものすべての形式」(Bolz und Reijen 1991, 42)についての研究としての存在論とも言えるかもしれない。

## 6 中間まとめ一次のステップへ向けて

それではこのように解明されたベンヤミンの初期言語論における固有名の概念は、記憶とどのように関わっているのだろうか。ここでは、次の研究段階へ向けていくつかの手がかりをあらかじめ示しておくことにしよう。

ベンヤミンは、「言語一般および人間の言語について」第21段落において、人間による名づけがつねに過剰なものであるという注目すべき指摘を行っている。

「事物は神のなか以外には固有名をもたない。というのは、神は創造する言葉において、事物を、むしろその固有名を呼んで生ぜしめたのだから。これに対して、人間たちの言語においては、事物は過剰に命名されている。人間の言語が事物の言語に対してもつ関係のなかには、近似的に「過剰命名」(Überbenennung)と言わせるものが混じりこんでいる。それはつまり、すべての悲しみの、そして(事物の側から見た)すべての沈黙のきわめて深い言語的原因をなす、過剰命名である。」(GS II, 155f.)

この人間の言語による「過剰命名」とは、バベルの塔のエピソードにより、何百もの人間の言語が成立し、人間が勝手にこれらの言語で命名しているという事態(『創世記』第11章)を指し示している。この「過剰命名」は、固有名と記憶の関わりを問う本研究にとって重要な手がかりになると私は考えており、詳細な研究を

次稿で行う予定である。

また、固有名と記憶の関わりを探究する際に、導きの糸となるような固有名の経験が必要だろう。ここでは地名（街路名）と人名に関わる経験を示しておこう。

ベンヤミンは、ベルリンでの幼少時代、街路名について、日々独特の経験を積み重ねていた。「1900年頃のベルリンの幼年時代」\*<sup>6</sup>のなかには、「ブルームスホーフ12番地」(Blumeshof 12)と題された章のなかに次のような興味深い記述がある。

「この通りの名は、ブルームス・ホーフ (Blumes-Hof) ではなく、ブルーム・ツォーフ (Blume-zof) と発音された。それで、このすまいに足を踏み入れると、私の目にはまず、襷がいっぱいついた被いのなかから、とても大きなプラッシュ製の花 (Plüschblume) が飛びこんできた。」(GS VII, 411)

また、同じ「1900年頃のベルリンの幼年時代」のなかの「蝶を追う」という短文では、ベンヤミン家の夏の別荘があったブラウハウスベルク (Brauhäuserberg) という地名について、地理的な場所を指示する単なる記号ではなく、「大人になった者を容易に近づかせないような解きたい魔力」(GS VII, 393) をもった名・固有名として述べている\*<sup>7</sup>。(cf. 道簾 1997, 101f.)

こうしたいわば「街路のシニフィアン」(cf. 鹿島 1996) を巡る経験は、彼の幼年時代に限られたものではない。『パサージュ論』のなかには街路名を巡るさまざまな経験が「P パリの街路」の断章群として纏められており、さらには次のような引用も書き留められている。

「固有名も概念として作用するのではなく、純粋に響きの上で作用するのである。固有名はクルティウスの表現を用いれば、「未記入の用

紙」である。プルーストはこれに感覚を記入することができる。」[P1a, 7]

さらに人名に関わる経験についても注目すべきものを一つだけ示しておく。「ベルリン年代記」のなかに、「知り合いの原型」(Urbekanntschaft) というよく知られたエピソードがある。

それは彼が、ある午後、パリのカフェ・ド・ドゥ・マゴで人を待っていた時の経験である。「その時突然、有無を言わせぬような力で、自分の生涯の図式 (graphisches Schema) を描こうという考えに捉えられたのである。しかも同時に、その作成の仕方まではっきりと分かったのであった。それは、私が自分の過去を探ろうとしたごく単純な問いかけであって、答えは、おのずから出てくるように、私が取り出した一枚の紙の上に描き出されたのだ。1、2年のうちに、この紙片を紛失した時、私は自分を慰めるすべを知らなかった。二度と再び私は、その時、一連の系図にも似て目の前に生まれてきたものを作成することができなかった。しかしいま、まさに再現はできなくとも、頭のなかでその見取図を復元しようとする時、私はむしろ迷宮として考えたいのだ。迷宮の謎の中心にある部屋に住んでいるものが、自我にしろ運命にしろ、それはここではどうでもいい。しかし内部に通じるたくさんの入口はそれだけいっそう大事なのだ。これらの入口を私は知り合いの原型と呼ぼう。その入口の一つ一つが、他人を介してでなく、隣人関係や血縁関係や同窓関係や人違いや旅行の道連れなど (中略) によって私の出会った人間との知り合いの図形的象徴なのである。」(GS VI, 491)

これはいわば人名で埋め尽くされた、ベンヤミンの生涯の図式であると言えるだろう。彼

は、知り合いの原型の数だけ迷宮への入口があると述べている。この迷宮は、実は記憶の迷宮でもある。この点は忘れられてはならない。

さて、本稿でのベンヤミン初期言語論における固有名に関する研究を踏まえ、これらの手がかりを導きの糸として、次稿では固有名と記憶の関わりについて研究を進めることにしよう。

(以下、「固有名と記憶(2)」に続く。)

## 凡例

(1) ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、括弧内にGSの略号の後に以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*) 所収の草稿群については、整理番号により示す。

(2) ヴァルター・ベンヤミンの書簡からの引用箇所は、括弧内にGBの略号の後に、以下の書簡集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, hrsg. von Theodor W. Adorno Archiv, Suhrkamp, 1995-2000.

(3) 引用に際しては既存の邦訳書を参照したが、訳文は必要に応じて神谷自身が訳し変えている。また、引用文中の傍点による強調はすべてベンヤミンによるものであり、原文ではイタリックである。

## 註

\* 1 聖書からの引用は、日本聖書協会の口語訳(1955年)による。

\* 2 名と関連づけて、ここに「啓示」(Offenbarung)

(GS II, 146) の概念が現れる。ベンヤミンは次のように述べる。「宗教という最高の精神領域は、(啓示の概念においては) 同時に、語りえぬものを知らない唯一の領域である。なぜなら、それは名において語りかけられ、啓示として自己を語り出すからである。」(GS II, 146)

ベンヤミンは、啓示の概念を言語哲学を宗教哲学に緊密に結びつけてきた概念と考えている。ただし、ここでは啓示を単に神学的概念としてのみ理解することは危険である。神学的意味をもちつつも同時に「露わに示されているもの」という、この語の原義が強く影響した用法と理解すべきである。(細見 2009, 80f.)

\* 3 デリダは、「バベルの塔」において、ベンヤミンの言語論の根底には固有名の理論があると指摘している。(Derrida 1987, 218f.) デリダにとって、固有名は神に祝福されたものではない。彼は、この論考のなかで、「名の暴力の根源性」について言及しており、『グラマトロジーについて』のなかでも、名づけることは言語の「第一の暴力」(Derrida 1967, 164) であると主張している。「名の暴力性」については、内村(2001)や柿木(2005)の研究が参考になる。

\* 4 ベンヤミンの翻訳論について、本格的・主題的に研究するためには、「翻訳者の使命」を詳細に読む必要がある。これは、ベンヤミンが1923年にボードレー『悪の華』のなかの「パリ情景」を翻訳し、独仏対訳で出版した際に、序文として書かれたものである。このなかに登場する、作品の「存える生」(Überleben) (GS IV, 10)、「死後の生」(Fortleben) (GS IV, 11) という概念は、「固有名と記憶」を考察する本研究にとって重要なヒントを与えてくれるものと考えている。

\* 5 ここで語られる「認識」と「記憶」との関係を考究することも、私にとっては重要な哲学的課題である。

\* 6 「1900年頃のベルリンの幼年時代」からの引用は、原則として、1981年にパリの国立図書館で発見された「最終稿」(Fassung letzter Hand)による。これはベンヤミンが亡命のためにパリを去る時、この図書館の司書であったジョルジュ・パタイユに託して、ナチスの目を逃れた原稿群に含まれていたものである。

\* 7 このブラウハウスベルクという地名について、「ベルリン年代記」では、次のように語られている。「この言葉がうちに含むものを捉えようとすることは、ほとんど不可能である。子どもと大人という二つの言語領域の境界に位置するこの種の言葉は、詩の言葉と世俗の言葉との間の内的葛藤によっていわば喰らい尽くされて、ほのかに消えてゆく吐息と化してしまった、あのマラルメの詩の言葉にたとえることができるだろう。」(GS VI, 495)

## 参考文献

- Bolz, Norbert und Reijen, Willem van(hrsg.)(1991): *Walter Benjamin*, Campus.
- Campanini, Saverio(2007): Parva scholemiana II. Rassegna di bibliografia, *Materia Giudaica* XII 1/2, 291-311.
- Derrida, Jacques(1967): *De la grammatologie*, Minuit.  
—(1987): *Psyché, Invention de l'autre*, Galilée.  
—(1996): *Le monolinguisme de l'autre, ou, La prothèse d'origine*, Galilée.
- Düttmann, Alexander Garcia(1989): *La parole donnée: Mémoire et promesse*, Galilée
- Fischer-Defoy, Christine(hrsg.)(2006): *Walter Benjamin: das Adressbuch des Exils 1933-1940*, Koehler & Amelang.
- Handelman, Susan A. (1991): *Fragments of Redemption: Jewish thought and literary theory in Benjamin, Scholem, and Levinas.*, Indiana U.P.

- Hirsch, Alfred(1995): *Der Dialog der Sprachen: Studien zum Sprach- und Übersetzungsdenken Walter Benjamins und Jacques Derridas*, W. Fink.
- Kather, Regine(1989): “*Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*”, *die Sprachphilosophie Walter Benjamins*, Peter Lang.
- Menninghaus, Winfried(1986): *Schwelkenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.  
—(1995): *Walter Benjamins Theorie der Sprachmagie*, Suhrkamp.
- Mosès, Stéphane(2006): *L'ange de l'histoire: Rosenzweig, Benjamin, Scholem*, Gallimard.
- Opitz, Michael und Wizisla, Erdmut(hrsg.)(2000): *Benjamins Begriffe*, Suhrkamp.
- Reijen, van Willem und Doorn, van Herman (2001): *Aufenthalte und Passagen: Leben und Werk Walter Benjamins: eine Chronik*, Suhrkamp.
- Scholem, Gershom(1975): *Walter Benjamin: Die Geschichte einer Freundschaft*, Suhrkamp.
- Walter Benjamin Archiv(hrsg.)(2006): *Walter Benjamins Archive: Bilder, Texte und Zeichen*, Suhrkamp.
- 浅井健二郎 (1995) : 「解説」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション1 近代の意味』筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉
- 内村博信 (2001) : 「固有名と翻訳可能性—ヴァルター・ベンヤミンの言語論—」、『ドイツ文学』第106号、日本独文学会、123-133
- 大宮勘一郎 (2008) : 『ベンヤミンの通路』未来社
- 小田智敏 (2001) : 「E.プロッホとベンヤミン—Eingedenkenをめぐる—」、『ドイツ文学』第106号、日本独文学会、112-122
- 柿木伸之 (1996) : 「破片の記憶を語る—ベンヤミンの〈翻訳〉と歴史の他者—」、『哲学論集』第25号、上智大学哲学会、65-79

— (2000)：「翻訳という出来事—ベンヤミンの思考における翻訳の概念—」、『哲学科紀要』第26号、上智大学文学部、39-78

— (2005)：「翻訳としての言語—「言語一般および人間の言語について」におけるベンヤミンの言語哲学—」、『広島国際研究』第11巻、広島市立大学国際学部、195-227

— (2008)：「ベンヤミン」、野家啓一編『哲学の歴史第10巻—現象学と社会批判』中央公論新社

鹿島 茂 (1996)：『『パサージュ論』熟読玩味』青土社

神谷英二 (2009)：「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第17巻第2号、福岡県立大学人間社会学部、67-79

多木浩二 (2004)：『雑学者の夢』岩波書店

野村 修 (1993)：『ベンヤミンの生涯』平凡社〈平凡社ライブラリー〉

古川千家 (1989)：「プロッホとベンヤミン—作用史研究(上)—」、『愛媛大学教養部紀要』Vol.22, No.3、愛媛大学教養部、176-192

— (1997)：「プロッホとベンヤミン—作用史研究(下)—」、『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第3号、愛媛大学法文学部、65-98

細見和之 (2009)：『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む—言葉と語りえぬもの—』岩波書店

道簇泰三 (1997)：『ベンヤミン解説』白水社

山口裕之 (2003)：『ベンヤミンのアレゴリー的思考』人文書院

\* 本論文は、日本学術振興会・平成21年度科学研究費補助金・基盤研究(C)、研究課題名：集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究(研究代表者：神谷英二、課題番号：19520025)の補助による研究成果の一部である。